

平和を実現する人々は幸いである。

学院長 嶋田 順好

こども園に 27 名、中学校に 53 名、高校に 115 名、大学に 792 名、大学院に 8 名の新入園児、生徒、学生、院生が入学し、2017 年度の歩みを始めることができました。11 月に開設された森のこども園は、二度目の入園式でしたが、改めて自分を守る術を一切知らない 0~2 歳児の幼子を預かる責任の重さというものを感じないわけにはいきません。現在の宮城学院には標準的な学齢ということ言えば、0 歳児から 24 歳までの園児、生徒、女子学生が在籍するようになりました。入園式や入学式に連なるたびに、新しく宮城学院に加えられた皆さんはもとより、ここで学ぶ全ての者の上に、主の変わらざる恵みと慈しみが豊かに注がれ、健やかな成長を遂げてほしいとの祈りを捧げずにはいられなくなります。

1952 (昭和 27) 年生まれのは、今年で 65 歳となりました。そんな私がいつも思い巡らすことは、わたしの生まれた年を起点に、それ以後の 65 年とそれ以前の 65 年を比較するということです。1952 年から 65 年前は、1887 (明治 20) 年となります。その年に生まれた人は、1952 年に至るまでの 65 年間に、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変、日中戦争、太平洋戦争を経験することとなりました。その軍人の犠牲者だけでも優に 240 万人を超えています。これに他国の軍人の犠牲者や非戦闘員の犠牲者を加えたらどれほど膨大な犠牲者となるかは、推して知るべしというものでしょう。

しかし、1952 年に生まれた私は、65 歳になるまで一度も祖国が直接戦争に巻き込まれる経験することなく人生を歩むことができたのです。戦後の戦死者は、朝鮮戦争の時に GHQ の命令により海上保安庁の職員として極秘で機雷掃海作業に従事し、触雷して犠牲となった中谷坂太郎氏のみということになります。この事実は、世界史的にみても極めて珍しい事態と言ってよいでしょう。この驚くべき恵みが出来事となるために、日本国憲法第 9 条の歯止めが、大きく抑止力として働いていたことを率直に承認することは、とても大切なことではないでしょうか。それと共に、今、宮城学院に連なる園児、生徒、学生、院生たちが、これからの 65 年間 (わたしの年齢を基準にして恐縮ですが) を、戦争に巻き込まれることなく平和なうちに喜びと感謝をもって歩み続けることができるようになることを切に祈り願わずにはいられなくなるのです。

戦後 72 年が経過しようとしています。英語の「Generation=世代」という言葉には、元々子どもが成人し、その子どもが生まれるまでの 30 年間という意味が込められています。戦後から 2 世代以上が過ぎ去り、孫から曾孫の代へとバトンタッチが進むなか、戦争の悲惨を思い起こし、平和の重みを真摯に受け止め、平和を実現するために想像力をたくましくすることが、すっかり痩せ衰えてきてしまっているように思えてならないのです。日本を始め、北東アジアや世界のいたるところで、時代の雰囲気、扇情主義的な流れに呑み込まれ、知的洞察に富んだ冷静さを失いつつある危うさを感じないわけにはいきません。

西ドイツの大統領であったリヒャルト・ヴァイツゼッカーが、終戦 40 年の記念日に連邦議会で行った「荒れ野の 40 年」と題される演説はつとに知られています。そのなかで「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在に対しても盲目となります。非人間的なことを心に刻もうとしない者は、再びそのような危険に陥りやすいのです」と警告したことを忘れてはならないでしょう。それとともに宮城学院の建学の精神に「人類の福祉と世界の平和に貢献する女性を育成する」と謳われていることを覚え、「平和を実現する」者としての使命感をもって、教育・研究の営みに専心する者でありたいと願います。